

『葛氏方』輯佚と葛洪の医方の伝承について

多田 伊織

京都大学人文科学研究所

晋の葛洪は、『抱朴子』内篇雜應篇で、当時通行していた医書が余りにも煩瑣で大部で、参照するに不便であり、且つ実際に運用するにも支障が多いことを批判し、病名ごとに分類排列し、できるだけ手に入りやすい薬種を用いるように配慮した『玉函方』100巻を撰述したと述べている。更に世人が救急医療にすぐに役立てられるよう、『玉函方』を要約して、3巻本の『救卒方』（『肘後方』）を編纂したことにも言及している。梁の陶弘景は『肘後方』を増補して全101条（『補闕肘後百一方』）とする。写本の時代には、『補闕肘後百一方』は、葛洪の原撰部分と陶弘景の増補部分は朱墨で色分けして書承されていた。北宋以降、版本の時代になると、原本と増補部分の区別をつけない形で版行されるようになる。今本『肘後備急方』は、金の楊用道の再増補を受けたもので、どの部分が葛洪原撰かは見分けられなくなっている。また、元になった『玉函方』は散逸している。翻って、唐代までの医書および遣唐使将来の医書を主な資料として編纂された丹波康頼『医心方』（984年成立）を繙くと、『肘後方』『玉函方』等からの引用の他に、『葛氏方』からの引用の存在が目をつく。

『葛氏方』とはいかなる医書なのか。本発表では、まず、唐代までに成立した他医書に引用される『葛氏方』『肘後方』『玉函方』等葛洪原撰の可能性のある医方に着目、『千金方』『外台秘要方』『医心方』等からできる限り広い範囲で輯佚を行った。こうして得られた『葛氏方』『肘後方』等葛洪原撰の可能性のある医方の諸条を今本『肘後備急方』と比較、葛洪原撰部が復元できるかどうかを検討する。例えば『外台秘要方』では『肘後方』『葛氏方』はそれぞれ別個の医書として扱われている箇所があり、同一方の条文にも出入が見られる。出入のある部分は、王燾が『肘後方』として引用する文言が葛洪原撰ではなく、陶弘景による『補闕肘後百一方』の増補部分である可能性が出てくる。また、少なくとも、唐代に『葛氏方』と呼ばれ、王燾が参照した書物は、『肘後方』とは異なった書承を経ていることは明かであり、葛洪の名を冠した医書が複数あり、写本の系統も単一ではない可能性を示唆している。『葛氏方』として引かれ、今本『肘後備急方』から漏れる部分については『玉函方』の佚文かどうかの検討が必要となる。

併せて、名前が似通っていて混同された恐れのある『備急方』等の引用も今本『肘後備急方』と比較する。その上で『葛氏方』と『肘後方』等の関係について明らかにし、『葛氏方』と呼ばれる医書の性格と葛洪の医書撰述の態度について検討を行う。

なお、輯佚に関していうならば、現行の『千金方』等唐代までの主要な医書には、北宋の校正医書局等による「宋改」の問題があり、『医心方』にも編集方針上の問題がある。このような資料的限界を踏まえた上で、現在利用できる最善本を用いて輯佚を行い、資料を扱うこととする。

（本発表は、日本学術振興会科学研究費基盤（C）「仏教東漸と東アジア仏教医学の展開（研究課題番号：24520039）」の助成による研究の一部である。）